

教育の適切な評価

小池関也

人間総合科学研究科講師

前号では特集内容として教育評価が取り上げられ、その中でも主に授業評価に対する学類・学系の試みや対策がいくつか紹介されている。学類や学系等、各組織にはそれぞれ対象学問分野に固有の特性があるため、その特徴に適した望ましい評価の必要性、およびその評価基準の設け方に対する難しさを感じた。本学のような総合大学では、単科大学に比べてその対象分野の多様さは顕著であり、すべてを同一のものさしで評価する方法では至極一般的な評価に留まってしまう。このためその組織の存在価値を高めるべきとなる固有の基準が、各組織で当然異なるだろう。また、教育の対象である学生については、学群生および大学院が在籍し、その評価対象も講義に対する授業評価、研究に対する指導評価など多岐に渡り、これが良いという答えのない問題に対する、それぞれの先生あるいは組織の工夫および苦心が読み取れた。さらに独立

法人化を迎えて、第三者的な評価に対して敏感にならざるを得ない今日において、客観的な評価基準を教育の過程の途中の在学生に置くのか、教育の成果である卒業生に置くのか、即時的評価なのか継続的評価とするのかなど、評価尺度に翻弄される期間がある程度続くのも仕様がなないのかもしれない。

高い大学院進学率、国際競争力の獲得など、大学院における研究・教育の専門化がますます進む一方で、高校教育の変更により質的に変化している学群入学生をどのようにして、その高みに導くかということも大きな課題として感じる。自己解決能力を有する人材を育てるためには、順風満帆な研究生生活をおくるよりも、ある程度の壁は必要かと思う。学生が、知識をため込むだけの壺ではなく、自ら光輝くランプになること、すなわち卒業生あるいは修了生が、牽引されるだけの客車や貨車でいるのか、それとも自ら動力を持って進む機関車となるのかに、たとえその全てではなくても大学教育が負うところは大きい。自己解決能力を持った動力を有する人材を育成するためには、学生の即時的な評価は低くなるかもしれないが、分かるまで悩み考えさせる教育も必要かと思う。

(こいけ せきや/スポーツ工学、スポーツバイオメカニクス)